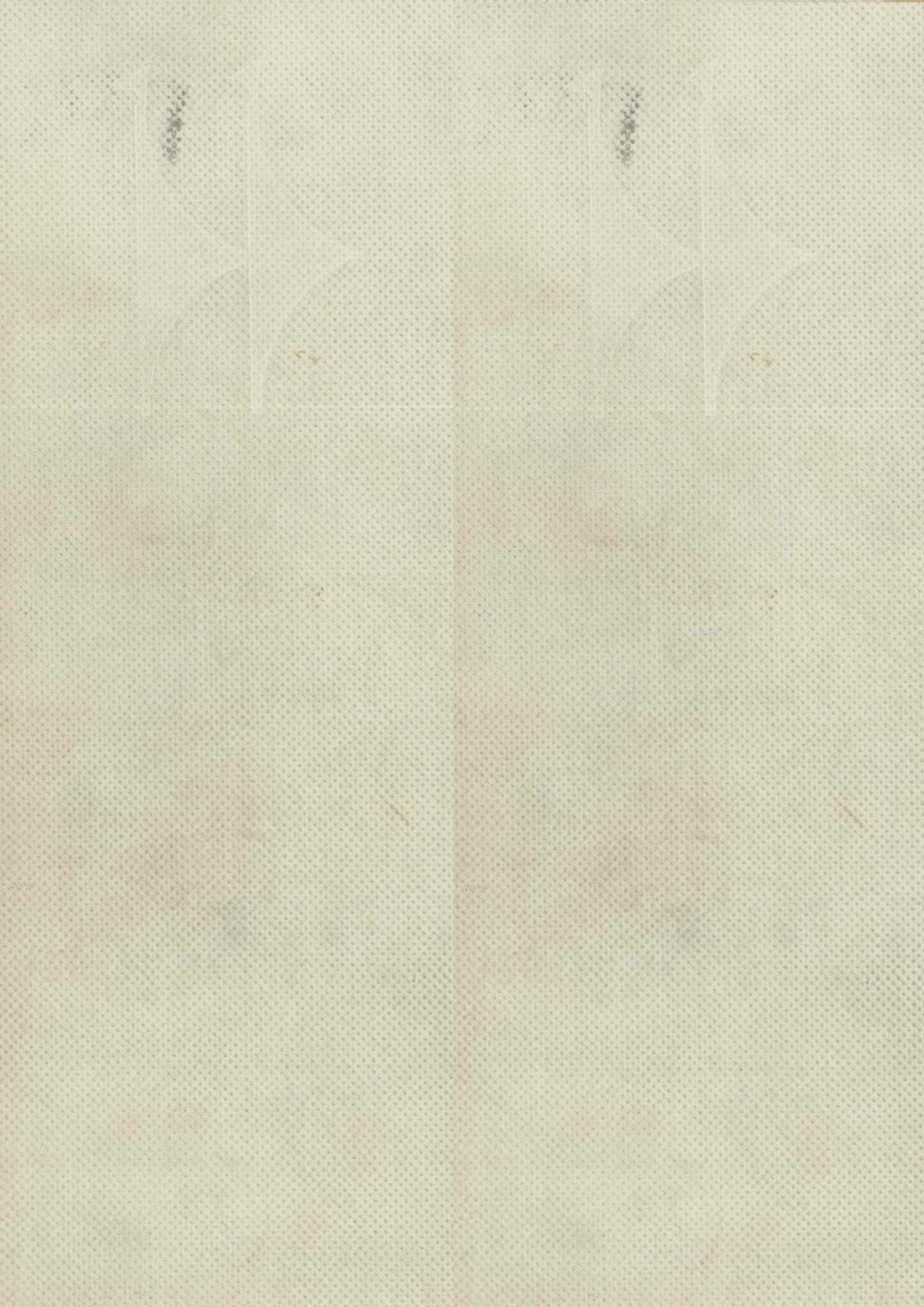
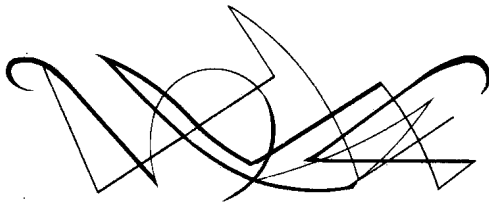






日本現代文學全集・講談社版 89

伊藤永之介 本庄陸男 集
森山 啓 橋本英吉

89

伊藤永之介・本橋庄陸男吉集

伊藤 藤 整
龜井 勝一 郎
中村 光 夫
平野 謙
山本 健 吉



昭和43年7月10日印刷
昭和43年7月19日發行

定價 600 圓

© KÔDANSHA 1968

著者 伊藤 野 北
發行 藤永 間 省
印刷 本 山 本 英 一 衛

發 行 所 株式會社 講 談 社
東京 都 文 京 區 音 羽 2-12-21
郵便 番 號 112
電話 東京 (942) 1111 (大 代 表)
振 替 東 京 3 9 3 0

印刷版複製製紙背紙口用貼見取	眞印	刷製本兩革紙工用紙貼用紙
大日本印刷株式會社		株會社興陽社
株會社大進堂所井		株會社大進堂所井
株會社石川紙器		株會社石川紙器
日本クロス工業株式會社		日本クロス工業株式會社
本州加製紙株式會社		本州加製紙株式會社
安三川工業株式會社		安三川工業株式會社
三菱製紙株式會社		三菱製紙株式會社
神崎製紙株式會社		神崎製紙株式會社

落丁本・亂丁本はお取り替えいたします。

伊藤永之介集 目次

卷頭寫眞
筆 蹟

參考文獻……………
四四三

萬寶山……………	七
梟……………	二四
燕……………	三三
雪代とその一家……………	六五
作品解説……………	平野 謙 四七
伊藤永之介入門……………	紅野敏郎 四五
年 譜……………	四三

本庄陸男集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

作品解説……………平野 謙 四九

本庄陸男入門……………紅野敏郎 四七

年 譜……………四三

参考文献……………四四

失業教員……………一〇七

水と石……………一二

白い壁……………一三

火の物語……………一五

團 體……………一四

妻におくるの書……………一七

運河の蔭……………一九

女の子男の子……………二〇

森山 啓集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

遠方の人……………三〇七

誰にささげん……………三三五

暮 春……………三四五

萱 原……………三四五

青 春……………三六一

涙 痕……………三七一〇

風の吹く道……………三六〇

緑の袴……………三六七

農婦病……………二六六

作品解説……………平野 謙四一

森山啓入門……………紅野敏郎四一九

年 譜……………四三三

参考文献……………四四五

橋本英吉集 目次

卷頭寫眞
筆 蹟

作品解説	平野 謙	四三
橋本英吉入門	紅野 敏郎	四二
年 譜		四三
参考文献		四六

眼	三〇九
市街戦	三二
メキシコ共和國の滅亡	三六
ところはちぶ	四九
櫛の芽立	三七
朝	七四
三庄大夫	六三
天平	五五

伊藤永之介集

山美く
人貧し

伊藤永之介

萬寶山

豚の啼聲が夕榮の空にワン／＼響き返つてゐた。

「何時になつたら、工事さかゝるべなア」

鶏に餌をやつて戻つて来た裴貞花が訊いた。

顔にブツ／＼粟粒のやうな汗を浮かして、趙は一生懸命に滿洲式の柳斗子（種籠）を編んでゐた。朝鮮の故郷を地主に追ひ出され、大陸での永い放浪生活の間に覺えた夜業仕事だつた。

「まだ長秋から返事來ねえだとも、はじめねばこまるベエ」

彼等は三月にこの土地へ移つて來て開墾をはじめた。平原では何處もさうだつたが、此處も水利がまるで無かつた。約十五支里東を流れてゐる井通河まで、水田から一直線に水路をつくることになつた。開墾の方がほど片附くと、すぐ部落總出でそれにかゝつて、それも完成に近いところまで漕ぎつけた。ところが突然、橋林省から工事中止の通告書が來た。せうことなく十日程前から仕事を休んでゐた。

「何日になつたら、返事來るてヨ」

「分らねえ……」

趙は不機嫌をかくせなかつた。

通告書を受けるとすぐ、金光水と趙の二人が、長秋に馬を飛ばし、領事館と鮮人居留民會に取消を要求して呉れるやうにと訴へ

た。そしてその後、何度返事をきゝに行つたか知れなかつた。工事は半日を争ふのだ。

しかし交渉して呉れてゐるものか、居ないものか、それさへ埒が明かなかつた。

女房は炕に這ひ上つて、兩腕に膝小僧を抱いた。

もう日影も消えたのに、彼女は飯の支度に立たうとしなかつた。

「こんな事してゐたら、皆乾干しになつてしまふベエ」

暫らくして咽喉のつまつた聲で言つた。

それから此方、麥粥ばかり食つてゐたが、それも今朝で種切れになつた。それをどうするかと言つてゐるのだ。

「そだとも、俺アすぐ工事さかゝるやうに相談して來るつもりだヨ」

榆樹の方では、もう稻が四五寸にのびたところもあるらしかつた。明日にも水路が通じなかつたら、今年は收穫皆無だ。行先は眞ッ暗だつた。

クル／＼と不馴れな手付で、趙は柳の小枝を編み續けた。水で薄めた粥を食つた切りで、眼先が暗むやうだ。

「愚圖々々してないで、粟でも借りて來ねえかよ。」

向ッ腹で咽喉まで出たが、言ひ出す氣力がなかつた。隣り近所を借り盡して了つてゐた。それに彼等だつて餘分がある譯ぢやない。

「何時賣りに行く氣だか、遅くなつたら買手なかに」

女房は腹立たしげに、趙の手元を凝視めた。柳斗子はやつと二ツ出來た切りだつた。四、五日過ぎたらこの邊の支那人百姓は穀蒔きを終る。

「明日二ツでも三ツでも持つて行くべ、なんぼとも言はれねえ……」

趙は右手の甲で汗と涙汁を一緒にぬぐつた。

姜點始の婆さんがドロ／＼に汚れた裳を揺つて遣入つて來た。

素焼の湯器を兩手に持つてゐる。

「日が永くなつたの才、これ今ためしに拵へて見たから、食うて見てけれ」

湯器の中のもののは焼きたての包米だつた。

褒貞花は、急に笑顔を寄せて立上つた。

「あい、またなア、何時も貰つてばかり居て……」

「なんの……下手だからうまくねえかも知れねえども」

婆さんはノソノソと出て行つた。

外で遊んでゐた息子の太秀が、跣足でチョココと駆け込んで来た。

太秀は薄暗がり、眼を光らして母親の方を見てゐたが、歪んだ飯床の前に膝をつくと、早速包米をバクつきはじめた。

「これヨ、お前ばかり食ふでねえどオ、この乞食餓鬼」

母親が恐ろしい見舞で怒鳴つた。

が、太秀は母親に背中を見せて、がつくとむさぼり食つた。

「太秀や、貴様ばかり食ふものでねえ」

趙も土間から首をもたげた。

母親が息子の手から湯器を引つた。

「おい、誰か居るか」

そのとき、青い長褂子を着た巡警がのそりと這入つて来た。

丸太で背中をどやされたやうに、趙と女房は飛び上つた。

「こりや、たゞ事ぢやない。」

趙は、光りのない怯えた眼をシヨボ／＼させた。

「お前は何か、農具は縣の指定のものをつかはねばならん事を知つてゐるだらうな、どうだ」

巡警は彼を眞向からねめつけて、右手に握つてゐる、袋入りの鐵棒の端を動かして見せた。

「ハア、それはもう……」

趙は土べたに尻餅をついたまゝ、哀れつばい眼で巡警を見た。

と十個ばかりの柳斗子を擔いだ支那人が巡警のうしろから顔を

した。

「これはなア、値も安いし、使ひいゝし、一舉兩得ぢや、お前さんの仲間がみんな大喜びで買つた品物だ」

支那人は變に早口で喋つた。

太士河のほとりに居たとき、精米所を經營してゐる巡警が、自分のところで精白しない米には税金をかけると言つて、鮮人百姓を困らしたことを思ひ出した。

趙は平あやまりにあやまつた。

「金さへあれば貰ふども、食ふことも出来ねえ始末で……それに俺ア、この通り自分でつくつてゐるでなア」

「何だ、そりや、柳斗子ぢやないか」

黒い顔に菊面のある巡警は前に屈んで、趙が出した柳斗子を鐵棒に引つけて、グイと引つ張つた。

「こつちへ出せ、お前は許可を受けてゐるのか、指定のもの以外勝手に賣り廻はることはならん」

狡るさうな眼の支那人は、猫のやうに素早く、二つの柳斗子をひつた。

趙は怒つて滅茶に飛びかゝつて行つた。

と、巡警の鐵棒がドシ／＼と肩から背中に來た。趙はカッと頭に何か上るやうな氣がして、土間に仰向けにブツ倒れた。

「あれ、なにするツ、それだの持つて行かれたら、俺アどうなるか……」

女房が顔を眞ッ赤にして怒つた猿のやうに土間に飛び降りた。

「黙れツ、餘計な口をたゝくな」

巡警は憎々しい歪んだ背中を見せて立ち去つた。

その夜、鮮農仲間のかたまつてゐる四支里ばかり先の部落に、趙判世は工事繼續の相談に出かけて行つた。

二

鈍い太陽がいつも同じ高さにあるやうな氣がする。そんな荒れた平原地帯であつた。

何方を向いても何一つ眼ざはりになるものがない。

北の方角に低い丘が見えるだけの平野は、狂暴な冬が、殴りつけ、引き裂いた、荒ッばい起伏を見せて何處までもひろがつてゐた。

風の音だけが、パン粉のやうに埃りをかぶつた赤錆びた雜草に唸つてゐた。

白い埃りが絶えず捲き上つて、野面を何處までも吹いて行く。

遙か東の方に井通河が横たはつてゐる。野面をそつちに向けて生しい黒粘土を掘り返した水路が、地割れのやうに走つてゐた。

「それ、もう一頭張りだ、皆精出せヨ——」

趙判世の削つたやうな頬には、微笑がムズ／＼と這ひ上つた。

すばつとスコップを抱き込んで離さない粘土を、趙は根かぎりの力で跳ね上げた。その度にムツと息詰まるやうな新しい土塊の臭ひが、空ッばの胃袋までつきぬけた。

「おい、来た、承知だ」

苦力と百姓の群が、彼の周囲で必死になつて動いてゐた。その横顔が胡麻油を塗つたやうに汗で光つた。

あの夜、趙判世が相談に行くと、金光水の家に部落の百姓達が寄集つてゐた。もう誰も、領事館や居留民會の交渉を當にしてゐるものがなかつた。工事は次の日から繼續されることになつた。

それから今日で四日目だつた。もう一町ばかりで水路は貫通するところまで來てゐた。

粘土が黒砂糖のやうにモク／＼と掘り返されて行つた。段々掘り下げるほど赤ちやけた色になつた。

頭の上をトロッコがゴーツと矢のやうに走つた。モッコをかつい

だ百姓たちが、上にかけて渡した足代板を、凹んだ腹を折り曲げてヒヨロ／＼上つて行つた。

「寝ぼけるでねえぞ、高い切場だつたら命とりだよ」

誰かが唸つた。足代板から寝呆けて轉げ落ちた仲間が、顔一杯泥まぶれになつて起き上つたところだつた。さういふ誰も寝呆けて居ないものはなかつた。眼の先が霞んで自分が何をしてるか分らなかつた。

「おい、何處まで來たア」

叫びと一緒に、すぐ向うの地表に猿のやうに飛び上つたのは姜黠始だつた。

此方からも誰か叫んだ。

「會ひたさ、見たさにやつて來たヨ」

笑ひ聲が地の底から爆發した。かけ聲がそれに元氣づけられるやうに調子を合はせた。

黒砂糖色の顎骨と咽喉笛の飛び出た數十人の苦力と百姓が、ドシドシとスコを揮つてゐた。

黒土が炭煙のやうに崩れる。うしろに投げすてられる。

二間幅の水路は、人が歩くやうな速さでのびて行く。

「この分ちや、明日にも水通せるぞオ」

趙は泥まぶれの握拳で額の汗をこすつて叫んだ。

内地人の地主に田を借金のかたに奪はれ、家まで抵當にふんだくられて、國境から流れ出て以來、何年も忘れてゐた人間らしい氣持ちが、ムズ／＼と全身を流れるのを覺えた。

金光水たち數人が此處へ辿りついたのは三月はじめだつた。彼等は當座、長秋で阿片の密賣をしてゐる鮮人仲間の厄介になつてゐたが、此の邊の土地が荒れるに任せて放擲してあるのを知ると、その借地に百方奔走した。地主との直接交渉は、思ふやうに進まなかつたので、ブローカーの沈を通じてこの五百天地の荒蕪地を一天地につき年穀二石で向う十箇年間契約したが、五百天地を開墾するに

はこの數家族ではどうにもならなかつた。もと慶尚南道で面長をして居た關係で、金は自分の近郷から大陸に流れ込んで來てゐる澤山の百姓を知つてゐた。彼はそれら呼び集める事に氣がついた。

間もなくそこには、地主や巡警に北へ北へと追ひまくられた百姓達が群つて來た。荒れた野面には、高粱桿で蒲鉾形に屋根をふいた泥の家が、ボックリ／＼と立ち並んだ。

しづかな野面に、彼等の叫び聲や物音が日に日に高まり出した。十人、二十人、三十人と、泥と垢で白衣をテカ／＼光らせた鮮人の群が流れ込んで來た。趙判世の辿りついたのは四月に這入つてからだつた。

「おーい、おーい、來たぞぞ」

不意に地表からどえらい叫聲が起つた。

何事だ。趙判世はスコップを投げすて、水路から駆け上つた。

「見る、馬兵でねえか、此方に來るぞぞ」

百姓たちは足代板を柳條のやうにたゆませて、地表にかけあがつた。

井通河の岸を紐のやうに馬兵の群が此方に續いてゐた。何百騎あるとも知れなかつた。

それは悪い夢のやうに、平野の汚點になつて流れて來る。

趙判世の後頭部を不吉な疎感が掠めた。

馬兵、それは惡病だつた。彼はこの馬兵に二度も村から追はれた。一度は家宅搜索を受けたときに、彼等の侵入を遮つた爲に、矢庭に銃床を横顔に受けた。その傷はまだ毛蟲のやうにこめかみの下に残つてゐた。

——來た。全然豫想してゐないことではなかつた。が、それはたうとう來た。

野ッ原にボロ屑のやうに群つた百姓たちは、背を丸めて一セイに河の方を向いてゐた。

馬兵を乗せた一頭の足の短い滿洲馬が、ブン／＼眞新しい香りの

する粘土を四方に蹴散らかして、砲丸のやうに百姓の群の間を射ぬけて行つた。

「工事中止、省政府の命令ぢや、中止せいで」

と見ると、それまで縦隊だつた馬兵は、散弾のやうに野ッ原一面にひろがつて、暴風のやうに迫つてゐた。

逃げるひまもなかつた。パーッと飛沫のやうに逃げ散る苦力と百姓を蹴散らして、馬隊は疾風のやうに驅けぬけた。そしてまた戻つて來た。

野面で、汚れた白衣の百姓達が野鼠のやうに亂れた。悲鳴や叫びや呻めきが、ドドドッと地殻に轟く馬蹄の音にこんがらかつた。

趙は馬の蹴散らす泥土を浴びながら、無我夢中で、水路の底に飛び降りた。

「何だつて言ふだア、畜生、無法にも程がある」

一隊の青服の當兵（支那兵）が、すぐ上で馬をとめた。

「出ろ、おい、貴様出ろ、上つて來い」

黒土を崩してバラ／＼と飛び降りて來た當兵が、すぐ趙の腕をとらへた。

「こつちへ來い、行くんだ」

百姓たちは人々の頭越しに、襦ハカマの袖をグイとつかまれながら、反り返つて必死に反抗してゐる趙判世を見た。

「行く理由はねえで、俺ア何も悪いことした覚えはねえ」

ドシ／＼といふ鈍い音と一緒に、銃床が彼の瘦せた背中をどやした。

土にまみれ眞ッ黒に上衣を垢滲ませた百姓達は、たゞ光りのない眼でぼんやり眺めて居るだけだつた。

「こりや、ひどいべえ、今頃になつて工事を禁止するなんて無法だア」

若い胸板の厚い孫道時だけが、彼のそばを、雜草ばかり食はされてたぶつた馬の腹がかすめたとき、飛び上りざまに叫んだ。

亂れ立つた馬隊は、間もなく隊伍を整へた。そして先刻のやうに、縦隊になつて北の方にのろ／＼と動き出した。進むにしたがつて、土煙が二丈も三丈もの高さに濛々と立ちのぼつた。

逃げおくれた百姓たちは、彼方に三人、此方に五人と怯々とかたまつて、そつちを眺めやつた。

馬隊の眞中頃には、趙たちの積み込まれた荷馬車が動いてゐた。

身輕な騎馬に遅れまいとして、一生懸命足掻いてゐる駄馬の尻で、十人近い百姓が荷物のやうに飛び上つた。お互ひの肩を掴んで、ポロ屑のやうにかたまり合つてゐた。

「チヨセオン！」

誰かが哀れっぽい聲で趙判世を呼んだ。がそれつきりで、百姓の群は押黙つて、引かれて行く仲間を見送つた。

馬隊はやがて轟きを上げて、濁流のやうに野面を流れ去つた。

先頭の青い旗が、灰色に塗りつぶされた平原を、水脈のやうにふへて行つた。

三

黒帽子（日本警官）の着いたのは、次の日の夕方だつた。彼等は一臺の荷馬車に、毛布やら天幕やら饅頭やらを一杯に積んで、僅か五名の人数でのろ／＼とやつて來た。その荷物の中には機關銃があるのだと百姓達は噂し合つた。

彼等は警戒してゐる當兵の一隊とは數町離れた工事現場に落着いた。平安北道あたりから來たらしい鮮人の巡捕が居て、百姓たちに日本語で冗談口をきいた。

「えゝ娘が居たら世話せんかゝ」

誰も返事しない。

「ベッ、畜生め、作男の癖に、ピストルを下げたつて意張つて居やがる」

孫道時は眼をむき出して、口の中で唸つた。

黒帽子はみんなピストルを肩から脇へブラ下げてゐた。プローニングのピカ／＼する反射が五支里も先にゐる百姓の眼を射た。引き金の具合を調べたり、銃丸を装填したりするカチ／＼齒を食ひ合せるやうな音が、百姓たちを身ぶるひさせた。

數町先の野面に握拳みたいにかたまつた當兵の一隊も、雨雲のやうに凝んでゐた。

息詰まるやうなものを百姓たちは下ッ腹の方に重苦しく感じた。風がまるでない。

空氣までも呑んでしまひさうな、この地方特有の闇雲な乾燥が、野面を幹々と壓へつけた。

スコップの音だけが響いた。黒帽子は水路のへりを反り返りながら歩き廻つた。

夕方近く一團の黒いかたまりが曠野を動いて來た。

それは段々支那農民の群であることが分つた。百名ばかりの人数で、だら／＼と後から後から續いてゐた。

水路の開墾によつて多少の被害のある上流方面の農民が、非常に激昂して襲撃して來るだらうと云ふ噂が昨夜からあつた。堰止の上流は雨季になれば洪水に襲はれるし、たださへ沿岸の田畑は水門の完成と同時に浸水するといふ、支那官憲の誇大な煽動的宣傳が相當効いてゐるらしかつた。事實は、僅か一天地ばかりの水田に浸水するだけだつたが……。

「見ろよ、鐵砲もつてるもの居るぞ」

水路の底から眼だけ地表にのぞかせて呟いた。

「鐵砲だ、スコップもつてる者も居る」

「此方へ來るかヨオ」

野面を渡つて來る一團は、向うにかたまつてゐる馬隊の方に煙のやうに流れて行つた。

突然、薄氣味悪い砲聲が平原を二ツに切り裂いた。

「うー」

「はじまつたか」

苦力と百姓の首は一セいに地表に浮いた。

たゞ一發の銃聲は、疾風迅雷的な蒙古の洪水のやうに、平原の涯まで擴がつて行つて、何處か一方から鈍い呻めきが戻つて來た。

それつきり靜かだつた。が、平原の彼方に黒雲があらはれたが最後、忽ち嵐になりさうな、白み渡つた寂寥だつた。

夜になつた。

趙判世の女房の裴貞花は、家の中にとちこもつて永いこと膝小僧を抱いてゐた。膝小僧は絶えず、中風やみのやうに小刻みにふるへた。

水路工事に出てゐた趙が、當兵にひかれて行つたと聞くと、彼女は再び自分たちの前に盤石のやうな不幸の岩が立ちふさがつた氣がした。それは彼女が地主にこつびどく苛められたり、兵隊の銃尻で小突き廻されたりする度に感ずる不安だつた。

三世堡には保安隊が二百人も駐屯してゐた。彼女たちがこの土地に辿りついたときには、開墾の仕事も大分進んで、自分の住家など造ることなどにかまつて居られない忙しさだつたので、趙とその一家は、外の數家族といつしよに、朝鮮農民の殆んど居ないこの三世堡に、一先づ落着くことになつた。

それだけに裴貞花の不安は一通りでなかつた。何時、當兵や支那人百姓に襲はれないとも限らなかつた。

息子の太秀は、彼女の横で眼鼻立も分らないやうな眞つ黒い顔で、小鼻をヒク／＼させてねむつてゐた。

馬蹄の響きが間斷なく外の闇を掠め去つた。そのドド／＼と變に腹にこたへる地響きが、彼女をどやしつけた。

筆の先より小さい燈の焰が、百姓女にはめづらしい彼女のまるい豊かな日焼けした片頬を、闇のなかに浮きあがらせてゐた。

日暮れとともにしのび寄る底冷えが、脇の下から丸みのある背中

へ這ひ寄つた。

銃聲が四、五發響いた。

薄氣味悪い天地にこもつた唸りが、ボン／＼いふ最初の音のアトに尾をひくと、カチ／＼と彼女の齒が食ひ合つた。それがどうしてもとまらない。

脂垢でニタ／＼する蓆子が尻の方からゾク／＼する惡寒をつたへた。

誰かがドン／＼と戸をたゝいた。押黙つた闇にその音は不氣味に響き渡つた。

彼女はギョ／＼として、思はずそばに寝てゐる息子にしがみついた。

怯えた眼で闇を見詰めた。

「開けて呉れ、俺だ、外でもない俺だよ」

聞いたやうな聲だつた。さうだ、それは地主の張だ。

兵隊でないことが彼女をホツとさせた。が、膝頭のふるへは止らなかつた。

何やらギラ／＼光る長椅子を着込んだ張老人は、何時もと違つた性急な顔つきをしてゐた。

「主人は居ないかの……」

彼女はそらとぼけた。

「この二、三日戻つて來ませんが」

裴貞花は裳をふくらまして、困つたことでも起らねばよいがと、哀願するやうに額に細い皺を寄せてゐた。

老人は二十天地ばかりの田畑を持つて居るに過ぎない小地主だつた。彼女はまだこの老人からひどい仕打を受けたといふことは無かつた。

が突然張老人は、瘦せた右手をあげて、落着きのある聲で言ひ出した。

「お前さんには氣の毒ぢやがのオ、たつた今、お前さんに此處を出

て行つて貰はねえならなんぢや」

「えッ、なんだつてかえ、そんな無理なこと出来るもんだてか」
彼女は恐ろしさに、荒れた掌を額に上げた。

ねばけた息子の太秀が、テカ／＼垢光りのする蓆子の上にぼんやり突ッ立つてゐた。

と、老人の頬には曲りくねつた意地悪い皺が深くきざまれた。

「それや無理か知らんて……だがな、俺はおかげで、この年で一晚拘留されたんぢや」

張は蔑むやうに白い眉毛を上下に動かしした。

「また明日でも話は聞けども、今晚出て行くなんて、そんなこと

……」

烈しく両手を振り動かして泣聲を出した。

「……お前さん達に家を貸したばかりに、俺は公安局に一晚拘留されてお取調べを受けたんぢや、今晚すぐにお前さんに出て行つて貰はなかつたら、俺はどうなると思ふ」

重々しい靴音がして、四五人の歩兵が、ドヤ／＼と這入つて來た。

「大人、これがその家かな、誰も家族は居らん……」

その一人のどんぐり眼玉が、變に脂ツこく女房の圓みのある頬に注がれた。

「こりや。すぐに出て行けるわ、どれ／＼」

歩兵は木の根っ子のやうな首ッ玉をめぐらして、土間から炕へとジロ／＼見廻した。

「氣の毒ぢやが、さあ、出て行つて貰はう、俺の立つ瀬がないわう」

老人は鶏でも追ひ立てるやうに身構へた。

こんなことには馴れてゐる筈の太秀が、ワ／＼と両手で眼をこすつて泣いた。父親がゐないセキかも知れない。すると彼女も急に眼が熱くなつて譯分らず土間をウロ／＼歩き廻つた。

「おい、ぼや／＼すんな、俺がその邊までついて行つてやる、さあ出た／＼」

歩兵は銃尻で彼女の腰を押しまくつた。

「道具などまた後でとりに来るがえ」

その邊に轉つてゐる柳斗子や糞耗を老人は爪先で蹴つた。

「おい、豚は居ねえか、豚は？」

闇の中で野太い聲がした。歩兵たちが食糧を探し廻つてゐるらしい。

ケケッ、ケケケと鶏のさわぐ聲はすぐ止んだ。

「あ、鶏、それ持つて行かれたら……」

裏貞花は白い袴に風を入れて闇の中に駆け込んだ。

荒々しい腕がグイッと胴つ腹を締めつけるのを感じると同時に、

彼女のからだ全體が宙に浮いた。

「大人、あとは俺たちが引き受けるからお歸りなさい」

先刻の歩兵のふざけた聲だつた。

外の闇を數十騎の馬隊がかけ去つた。

四

紐のやうな雨が降つた。

夕方、平原の東方に煙雲が現はれると、メキ／＼と野面半面におしかぶさつた。最初、雨は白く光りながら横しぶきに降つた。

樹木は呻いた。ブル／＼とたまらなさうに錆びた雑草が身慄ひした。

乾き切つた地べたを、雨はまるい丸になつてコロ／＼轉げ廻つた。

それが見る／＼水溜りになると、地べたの凹みが、ゴク／＼咽喉を鳴らしてのみ込んだ。

何十日振りの雨だ。

冷々と氣持ちよかつた。

裴貞花は柳條を一杯に積んだ牛馬の上でブラン／＼足を動かしてゐた。

彼女の乗つてゐるのは牛車だったが、アトのは二臺とも馬車だった。牛はのろいので先に立つてゐた。

井通河は紐のやうに南へ／＼とのびて、その先は白くけぶつてゐた。降りはじめたばかりで水量はましてゐなかつたが、太い雨が白と降り注いでゐる様子は、悪い眺めではなかつた。

車は暫らく、魚の腹を割いたやうな生々しい赤土色の川床を、泥土に深く車輪をめり込ませて進んだ。

何處でも冬は雪に埋れた川だけが垣々とした交通路だったし、雪解水が流れ去つて、川床が露き出しになると、四頭も五頭も満洲馬を繋いだ荷馬車が、勢よく四方に泥土を吹き飛ばしてどこまでも河の中を馳つて行くのであつた。

岸が切り崩したやうに高くなると、荷車は、でんぐり返りさうに傾斜しながら、岸に這ひ上つた。

何處にも道路といふものがなかつた。樹木が殆んどないのを幸ひに、牛車は時化に乗つたやうに、前後左右に揺れ乍ら、岩でも根株でも藪でも、滅茶苦茶に乗り越え／＼進んだ。

後の車で白福岳がうなつた。

蒼い空にはヨ―

星も多いがネ

百姓の借金はヨ―

尙更多いんだア―

アーリラン アーリラン アーリランヨ

アーリラン コゲロ ノムカンダ

公安局の當兵は依然として去らなかつた。

水路が貫通してからも、三荷屯には二百名からの馬隊と歩兵が駐

屯してゐた。野面にはきまつて馬隊の列を見ることが出来た。青い旗がヒラ／＼揺れて丘のかげを走つた。

彼等は毎日のやうに、平原の彼方此方を押しまはつて、部落の鮮人百姓たちを脅しつけてゐた。

長銃やビストルやスコップを提げた支那人百姓が、野鼠の群のやうに野面を襲つて來た。發砲するのは主に彼等だった。

平原の支那農民は官憲から武器を供給されて所持してゐるらしい。が、長秋に相當の軍隊と多數の警官を擁してゐる領事館は、それにもかゝらずどうしたわけか新に一名の警官も送つて來ない。

「俺達が死んだつて誰が泣いて呉れるかよ」

この位は皆言ひ出した。

彼等の目的は鮮農達を此處から立退かせて、播種を待つてゐる五百天地の水田を、完全に支那人の支配に收めることだった。

が手薄にもせよ、黒帽子が形式的にも警戒して居る以上、彼等も無茶苦茶に手出しは出来なかつた。で馬隊は始終部落の周圍をどうどうめぐりして、威嚇を加へて居た。

若し部落の百姓達が、いよく井通河の堰止工事に着手したならば、立處に射殺すべしといふ省の命令が出たといふ噂が、部落の鮮農たちの耳にも這入つて來た。

無論、堰止工事に／＼つたならどんなことになるか分らなかつた。不安は夜霧のやうに濃くなつた。

が一方、堰止工事の時期は絶望的に迫つた。

食糧が缺乏した。高粱を残して居るものは何軒もなかつた。包米ばかり食つて咽喉のつまる思ひだった。水をガブのみして、眼をつぶつてやつと呑み下した。

何處がわるいといふでもなく、突然倒れるものが出た。栄養不良から病人が幾人も出た。

これで堰止工事がうまく行かなかつたらどうなるんだ。日に焼け